

噂ファーマの伝統とチョーサーの価値意識*

西 田 栄 毅

エドガール・モランが『オルレ안의うわさ』⁽¹⁾で行った、20世紀のフランスの地方都市で広まった、ユダヤ人の洋服店で女性誘拐が行われているという噂の調査報告は、まるで中世の伝承物語のようである。同時に、噂というものの恐ろしいまでの生命力をいやおうなく思い知らされる。モランは社会学者として、現代フランスにおける現象を調査して記録したわけだが、ハンス＝ヨアヒム・ノイバウアー Hans-Joachim Neubauer は古代ギリシアから現代までの噂の歴史を文化史的な視点から論じている。彼がその著書 *Fama: Eine Geschichte des Gerüchts* で取り上げているローマ時代のウェルギリウスやオウィディウスのファーマ “fama”、および中世のチョーサーのフェイム “fame” に関する記述は、中世英文学をやっている者にはおなじみのものがあり、さほど目新しい知見は見られない。だが、それ以前の古代ギリシアにおける噂への言及には、チョーサーの *The House of Fame* との関連でも興味深い点がある。以下に、ノイバウアーのギリシア時代から中世までの噂に関する研究を概観したあと、チョーサーが “fame” を主題化した時代的な背景を考察し、この作品のもつ意味を探ってみたい⁽²⁾。

I

ノイバウアーは噂を意味するギリシアの単語としてオッサ、バクシス、ファティスおよびフェーメーの4語に着目して、ホーマー、ソフォクレス、アイスキュロス、ヘシオドス、ピンダロス等の作品から当該箇所を引用している。それをまとめると以下のようなことになる⁽³⁾。

1 オツサ οσσα (ossa) : *a rumour*, which from its being unknown, was held divine.

1) Homer, *The Illiad*, 2 : 86-93 :

a. ... even so from the ships and huts before the low sea-beach marched forth in companies their many tribes to the place of gathering. And in their midst blazed forth Rumour, messenger of Zeus, urging them to go....⁽⁴⁾

b. From the camp

the troops were turning out now...

Like bees innumerable from ships and huts

down the deep foreshore streamed those regiments

toward the assembly ground — and Rumour blazed

among them like a crier sent from Zeus.⁽⁵⁾

2) Homer, *The Odyssey*, 24 : 412-13 :

a. So they [Odysseus and his family] were busied with their meal in the halls ; but meanwhile Rumour, the messenger, went swiftly throughout all the city, telling of the terrible death and fate of the wooers.⁽⁶⁾

b. Rumour as herald was streaming hotfoot through the city, crying the news of the suitors' hideous death and doom.⁽⁷⁾

2 Βακσις βαξις (baxis) : *saying*, esp. *an oracular saying, inspired utterance*.

1) Sophocles, *Ajax*, 998-99 :

a. For a swift rumour, like a voice from heaven, / Ran through the host that thou wert dead and gone.⁽⁸⁾

b. Yes, a swift-moving rumour, though the work of some god, went through all the Achaeans, that you were dead and gone.⁽⁹⁾

2) Aeschylus, *Agamemnon*, 475-78 :

a. Heralded by a beacon of good tidings a swift report has spread throughout the town. Yet whether it be true, or some deception of the gods, who

knows?⁽¹⁰⁾

b. Since the beacon's news was heard

Rumour flies through even street.

Ought we to believe a word?

Is it some inspired deceit?⁽¹¹⁾

3 ファティス φατις (phatis) : *voice from heaven* (not in Hom.), *oracle*.

1) Sophocles, *Ajax*, 826-27 :

a. I pray thee send some messenger to bear / To Teucer the sad tale...⁽¹²⁾

b. Send a messenger to bring the evil news to Teucer, so that he may be the first to handle me when I have fallen upon this sword, then newly bloodstained.⁽¹³⁾

2) Sophocles, *Ajax*, 977-78 :

a. Beloved Ajax, dearest of my kin, / Did fame not lie then? Has thou fared thus ill?⁽¹⁴⁾

b. O dearest Ajax, O brother who gave me comfort, have you in truth fared as the rumour said?⁽¹⁵⁾

4 フェーメー φήμη (pheme), Aeol. and Dor. φάμα (phama) : *utterance prompted by the gods, significant or prophetic saying*.

1) Hesiod, *Works and Days*, 760-64 :

Never make water in the mouths of rivers which flow to the sea, nor yet in springs ; but be careful to avoid this. And do not ease yourself in them : it is not well to do this.

So do : and avoid the talk of men. For Talk is mischievous, light and easily raised, but hard to bear and difficult to be rid of. Talk never wholly dies away when many people voice her : even Talk is in some ways divine.⁽¹⁶⁾

2) Pindar, "The Isthmian Odes," IV, 21-24 :

a. And the shaker of the earth, who dwelled at Onchêstus, and on the wave-

washed reef before the walls of Corinth, by granting that house this wondrous ode of victory, raiseth from her resting-place the olden fame of noble deeds ; for she was fallen on sleep ; but now she is roused again with beaming form, like the star of morning, a sight to see amid the other stars—....⁽¹⁷⁾

- b. [Poseidon] by granting this marvellous hymn to the clan
is rousing from its bed their ancient fame
for glorious deeds, for it had fallen
asleep ; but now it is awake and its body shines
like the Morning Star, splendid to behold among the
other stars.⁽¹⁸⁾

3) Sophocles, *Oedipus the King*, 158 :

- a. Offspring of golden Hope, thou *voice immortal, O tell me.⁽¹⁹⁾
b. Tell me, child of golden Hope, immortal *oracle.⁽²⁰⁾

*φάμα (phama)

さらに、ノイバウアーはフェーメーとローマ時代のファーマとの関連について “...even when we find in Pindar something that resembles Roman Fama, the Greek concept of *pheme* is not identical with its younger, anthropomorphic successor.” と述べているが、後のファーマの属性である翼がフェーメーの描写において現れるのは興味深い。古代ギリシアにおける噂は “divine power” と “human medium” という二重性をもっている。人間の声が個別性を失い、しだいに “a chain of anonymous speakers” となっていき、権威をもつようになる。そして、それは “collective consciousness” となり、支配者に対する抑制力としての機能をはたす⁽²¹⁾。

フェーメーは “voice of myth” として “both up-to-date news and its medium” となり、そして、少なくともプラトンの『法律』においては、“the primordial origins of myth” として反復によって絶えず更新しながら、文字文化とは別次元の社会的、歴史的に複雑な声の文化を形成し、“divine voice” の役割を

担うとみなされている。こうして、フェーメーは文化的な概念として、空間的・時間的に“collective knowledge”、“collective consciousness” および“public opinion”を、そして社会的には規範を形成する⁽²²⁾。

II

ローマ時代になると、噂・風説という現象は、文学的モチーフとして、“a mythical or allegorical figure”⁽²³⁾、すなわち「噂の神ファーマ」として一定の形象を持ち始める。

But who is fama? In Latin the word has a host of meanings, such as fame, public opinion, reputation, idle talk and rumour. A good name as much as a bad reputation is called *fama*. The word's meaning is double-edged: for while meaning “information” in the sense of news, fame also means the image that is formed of a person on account of this information.⁽²⁴⁾

とノイバウアーは述べている。ある人のその時代、その社会におけるイメージが“bona fama”すなわち良い評判、“fama mala”あるいは“infamia”すなわち悪評として形成されていく。アエネーアースとディードーの二人も、出会って恋に落ち、不倫の関係を結ぶまでは“bona fama”に支えられていた。これが一転して“fama mala”の嵐にさらされて、ディードーが自ら命を絶つ経緯は、チョーサーが*The House of Fame*の第1巻で要約している。そこで彼女は自分の死後に囁かれる悪評を嘆いている。ここには死後の名声を重要視する社会的な価値意識がみられる。しかし、他方では、群衆による評価、すなわち“fama popularis”を信頼することの危うさは無論のこと、キケロの『スキピオの夢』におけるように、この世界の“bona fama”の空間的、時間的な限界性を指摘する伝統があったし、超越的な存在を名声の基準とするよう教えるキリスト教の伝統もあった⁽²⁵⁾。

ウェルギリウスによりファーマはその形象が固定化され、一つの原型となる。いかなる悪よりも速い足、小さい背丈から天を衝くほど巨大に伸縮する身体、自在に動く翼、羽毛の数と同じほど多くの眼と口と舌と耳を持つ。しかも、その素性さえも明らかにされる。すなわち、「大地」の子にして巨人族の一員である。夜は眠ることなく天と地の間を飛び回り、昼は高い屋根や塔の上に座って見張りを行う。偽りと真実の別なくしがみつ⁽²⁶⁾。

他方、ウェルギリウスが「不気味な怪物」として描き出した噂の特異な属性を、オウィディウスはファーマの館の描写で示す。その館は宇宙の中心、すなわち空と海と大地の間の境界にあり、ここからはどんなに遠くにある国であろうと、この世のすべてが見え、いかなる話し声も耳に聞こえる。館には、数え切れないほどの門や何千もの入口があり、しかも門には閉じられるべき扉がない。昼夜を問わず開放されている。建物は青銅製で共鳴空間を構成し、聞こえてくるすべての物音や音声は反響し反復される。ここには静寂や沈黙はなく、かといって耳を聳する大きな騒音があるわけではなく、遠くに聞こえる海の音に似た眩き、消えゆく遠雷の音にも似た物音があるだけである。大広間には多くの噂や言葉が虚実入り混じってひしめき合っている。暇な人の耳におしゃべりを吹き込む者、聞いた話を言いふらす者、自分の聞いた話には必ず尾ひれをつけて話すので、話はどんどん大きくなる⁽²⁷⁾。

チョーサーがウェルギリウスのファーマ像とオウィディウスのファーマの館の記述を直接利用していることはあきらかである。チョーサーのファーマ像の一つの特徴は、メディア（媒体）としての噂—特に、悪評—の象徴としての性格が強かったそれまでのファーマに死後の名声を司る役割を与えたことだろう。チョーサー以後のファーマは、名声の象徴として描かれることが多くなる。しかし、チョーサー自身は、高い氷の山の断崖に立っている緑柱石の絢爛豪華な名声の館に、過去の有名な詩人・作家・歴史学者とともに留まることを望まない。そして、その近くの谷底にある、オウィディウスのファーマの館を髣髴とさせる、しかし、青銅ではなく黄、赤、緑の小枝で作られ、しかも回転していてもっと安定性を欠いた別の館へと行く。そこで語

り手は、まだ知らない新しいこと、“Tydynges...Of love” (1888-89) を知ることを求めている。しかし、詩はその噂の館の主と思われる “A man of gret auctorite” (2158) の登場の場面で突然に終わる⁽²⁸⁾。

噂は、既に見たように、単なる媒体としての機能を超えて、さまざまな意味層を形成する。そして、この噂というのは、言葉にほかならない。チャオサーは第2巻において、この言葉、特に音声言語の科学的な説明を、ジュピターの使いの鷲の口を通して行う。その説明では、語られた言葉というのは音であり、音は破れた空気であると定義される—

Soun ys noght but eyr ybroken ;
 And every speche that ys spoken,
 Lowd or pryvee, foul or fair,
 In his substaunce ys but air. (765-68)

そして、投げられた石によってできる水の波紋のアナロジーにより、名声の館へさまざまな音が届く原理が証明される。*The Riverside Chaucer* の “explanatory notes” によると、この音声理論は当時良く知られていたもので、チャオサーはボエティウスの著作を通してこれを知った可能性が高いが、他に、Vincent of Beauvais や Macrobius や Robert Grosseteste にも類似の記述が見られるという⁽²⁹⁾。中世の認識論の研究を行った Marcia L. Colish はその著書の中のアウグスティヌスの *De Doctrina christiana ; De vera religione* を要約した部分で、次のように述べている— “In their capacity as things, words are sounds, but this original character is, on the whole, subsumed by their significative function.”⁽³⁰⁾

第2巻から判断すると、チャオサーはこの作品を書くにあたって、言葉の「もの」としての物理的な伝達機能と同時に意味作用あるいは表象機能についてもあれこれ考えたであろうことは容易に推測される。また、夢の原因や種類をめぐるいろいろの解釈が並置されている箇所には、認識手段としての

言語の不確実性が明らかに示されているし、“The Invocation”において、誤解ないしは曲解する人たちに対する呪詛には、伝達の媒体としての言語への懐疑が看取される。

III

チョーサーがこのように、言葉や噂、風説あるいは世間の評判としての“fama”、あるいは“fame”を扱った作品を書こうとした動機は一体何であったのか。この問いに対する答えは、読者により異なり、チョーサーが第1巻の“Proem”において述べた夢の解釈と同じ結果になるように思われる。そして、それは噂を聞いて他の人に伝える際に、決してそのままではなく無意識にあるいは意識的に、虚偽—いやそう言ってよければ、自分の解釈—を付け加えるのと似ていると言えるかもしれない。しかし、おそらくそれが読む・書く・聞く・話すという人間の言語行為の宿命であろう。

この問いに対する答えは作品の中に求めるしかないだろうが、判断の参考とするために、文学的な伝統とは違う、中世ヨーロッパにおける実際の生活の場面で“fama”ないし“fame”がどういう形で現れていたのかを、Thelma FensterとDaniel Lord Smailの編集による著書を参考にして見ておきたいと思う。まずは、12世紀のイタリアのトスカーナ大公国を見てみよう。

Fama, most often *publica fama* (public fame) sometimes *vulgaris et frequens fama* (common and frequent fame), was one form of knowledge in twelfth-century Tuscany. It was contrasted with knowledge *per visum* (eyewitness knowledge), which was more reliable; it was also, however, distinct from *per auditum* (hearsay), which was not reliable.... *Public fama* might seem much like hearsay to us, but it was given more weight by its collective nature. It was what everybody knew, so it was socially accepted as reliable.⁽³¹⁾

したがって、裁判では第三者の立場にある証人を立てて、自分に権利があることを証言してもらうことが重要であった。そのためには一般的には、公に権利を証明する方法は、それを繰り返し行使して既成事実を作っておくことであった。もうひとつの方法は、権利についてしゃべることであった⁽³²⁾。

中世後期のコモンローやイタリアの都市国家の法律においては、“fama”はゴシップ、評判、“common knowledge”以上の重みがあり、個人あるいは集団の法律上の地位とも関連があった。“fama”は人々に、証人、公証人、家族の一員、市民等の信用される、あるいは、責任あるあらゆる資格や地位を与えるものであった。少なくとも、中世後期のフィレンツェでは、形式偏重の教会法や市民法、および市の法令やギルドを始めとする商人たちの規則を扱う法廷と諸々の規定が重層的に複雑に絡み合っていたので、“fama”が個人の地位のひとつの要素として働くことがあった。ちょうど自由や嫡出や成人であることがある種の権利や行動の保証となるように、“fama”も同じような役割を担っていた。“fama”は、ひとつの法的な地位として個人に法的な活動能力を賦与した。“bona fama”のある者は公職に就くことができたし、彼の宣誓証言は法廷で取り上げられるが、“infamis”（悪評）のある者は先ず拷問にかけられることになる⁽³³⁾。

事情はフランスでも同様で、良い評判“bonne renomée”があれば訴訟で勝利をおさめることができるが、悪い評判“mal renomés”の者は良い評判の者の不正行為を告発することができなかった。フランス南西部のガロンヌ川沿いの町アジャンでは、言葉に信用のおけない者の悪評が公衆の面前で儀式化されて罰が与えられた。たとえば、偽証罪の宣告を受けた者は、トランペットを吹き鳴らされて、舌には金属製の串をさされて、町中を連れ回された。13世紀まで、フランスの一般の裁判所ではほとんどすべての訴訟が口頭で行われていて、その経緯の大部分は記述されなかった。当時は、ある種の発言・言論、すなわち他者に対する誹謗・中傷を行った者は、肉体的な攻撃、時には殺されてもしかたのないことさえあった⁽³⁴⁾。

Sandy Bardsleyによると、13・14世紀のイギリスでは、特に教会の中で言

葉・言論の力 (the power of speech) に対する関心が高かった。カンタベリー管区内で第4回ラテラノ会議の教令を普及させるために、1222年に招集されたオックスフォード会議で可決された附則の中に、虚偽と悪意から他人を告発する者は、破門に処するというのがある。これは13世紀イギリスの全教区で採択された。教会法により、侮辱ないし名誉毀損に対する教会の支配権は断固として使用されたので、平信徒にもよく知られていた。他方、世俗の政権の方も、1275年と1276年に、反逆ばかりではなく国王や貴族に関する噂や中傷も禁ずる法律を制定した。こういう言論統制あるいは規制の法令が出される背景には、教会や法廷においてさまざまな“deviant speech”が行われていたという事実がある⁽³⁵⁾。

したがって、チョーサーが *The House of Fame* を書いた動機のひとつにはこうした中世の社会的な背景があった考えることができる。英語の“fame”にもラテン語の“fama”と同じく重層的な意味があることは、作品を読めば理解できる。そのことが最も明快に示されているのは、やはり名声を求める九つの集団に対する女神ファーマの判定の場面である。同じような仕事をしながら女神ファーマの下す判定は良い評判と悪い評判というまったく正反対のものであったり、当然悪い評判を得るべき者たちが良い評判を得たりする。なぜ、こういう結果が生じるのかは既に今まで見てきた通りである⁽³⁶⁾。

最後にまとめると、*The House of Fame* には、伝達手段であると同時に認識手段でもある言葉には真と偽の両方が含まれているために、誤認が生じ、この誤認が幻想を生み、今度は幻想が価値意識を生み出し、またこの価値意識が誤認を生むという構造が寓意的に描かれている。この価値意識は、一方では無限に自己肥大ないしは自己増殖するが、他方では無限に収縮する。第1巻の終わりで、ガラスのヴィーナスの館から出てきた語り手が、荒涼とした砂漠に佇み、思わず口にする次の祈りは、かなり暗示的である。

“O Crist! ...that art in blysse,

Fro fantome and illusion

Me save!" (492-94)

ペトラルカは著書 *Trionfi* で愛、貞潔、死、名声、時、永遠という価値のヒエラルキーを示した⁽³⁷⁾。しかし、チヨースーの語り手はこうした権威ある伝統に則した価値意識とはまったく別のもののように思われる。それは、誤認を前提としつつ、現実の生活世界の中にある、言語と幻想と価値意識の循環性が生み出す、多様な価値に自分の新たな文学の創造的な可能性を求めている。したがって、チヨースーは“fame”という表象を通じて時代の新たな価値意識を探ろうとしていると言えるかもしれない。

注

- * この論文は英語史研究会第10回記念大会（2003年9月27日、於九州大学六本松キャンパス）での口頭発表（「*The House of Fame* における“fame”の価値」）を發展させたものである。
- (1) Edgar Morin, *La rumeur d'Orléans* (Paris: Editions du Seuil, 1969), 及び『オルレアン のうわさ』、杉山光信訳（東京：みすず書房、1997）。
 - (2) ノイバウアーの原著は1998年に Berlin Verlag から出版されており、邦訳は『噂の研究』、西村正身訳（東京：青土社、2000）として出されているが、ここでは比較の便宜上、*The Rumour: A Cultural History*, trans. Christian Braun (London: Free Association Books, 1999) を使用。
 - (3) それぞれの単語の意味は *Greek-English Lexicon*, 9th ed. (Oxford: Clarendon Press, 1996) の Def. 1 による。挙げられている英訳のうち b. は Christian Braun の翻訳で使用されているものからの引用である。各英訳の下線は筆者による。
 - (4) Homer, *The Iliad*, trans. A. T. Murray, vol.1 (Cambridge, Mass.: Harvard UP; London: William Heinemann, 1978).
 - (5) Trans. Robert Fitzgerald (Oxford, 1998) 20.
 - (6) Homer, *The Odyssey*, A. T. Murray, vol.2 (Cambridge, Mass.: Harvard UP; London: William Heinemann, 1980).
 - (7) Trans. Walther Shewring (Oxford, 1998) 295.
 - (8) Sophocles, *Ajax, Electra, Trachiniae, Philoctetes*, trans. F. Storr, (Cambridge, Mass.: Harvard UP; London: William Heinemann, 1978).
 - (9) *Ajax, Electra, Oedipus Tyrannus*, ed. and trans. Hugh Lloyd-Jones (Cambridge, Mass.,

- 1994) 125.
- (10) Aeschylus, *Agamemnon, Libation-Bearers, Eumenides, Fragments, The Appendix*, trans. Herbert Weir Smyth (London : William Heinemann ; Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1971)
- (11) *The Oresteian Trilogy*, trans. Philip Vellacott (London, 1956) 60.
- (12) *Ajax, Electra, Trachiniai, Philoctetes*.
- (13) *Ajax, Electra, Oedipus Tyrannus*, ed. and trans. Hugh Lloyd-Jones 107.
- (14) *Ajax, Electra, Trachiniai, Philoctetes*.
- (15) Ed. and trans. Hugh Lloyd-Jones 121.
- (16) *Hesiod, The Homeric Hymns and Homerica*, trans. Hugh G. Evelyn-White (Cambridge, Mass. : Harvard UP ; London : William Heinemann, 1977).
- (17) Pindar, *The Odes of Pindar*, trans. Sir John Sandys (Cambridge, Mass. : Harvard UP ; London : William Heinemann, 1978).
- (18) *Nemean Odes, Isthmian Odes, Fragments*, ed. and trans. William H. Race (Cambridge, Mass., 1997) 165.
- (19) Sophocles, *Oedipus the King, Oedipus at Colonus, Antigone*, trans. F. Storr (Cambridge, Mass. : Harvard UP ; London : William Heinemann, 1977).
- (20) *Ajax, Electra, Oedipus Tyrannus*, 341.
- (21) Neubauer 21-24.
- (22) Neubauer 24.
- (23) Neubauer 36.
- (24) Neubauer 37.
- (25) Neubauer 38-39, 及⁵ Geoffrey Chaucer, *The House of Fame, The Riverside Chaucer*, ed. Larry D. Benson, based on ed. by F. N. Robinson, 3rd ed. (Boston : Houghton Mifflin, 1987) 239-382. 以後、チヨ一サーの作品からの引用はすべてこれによる。
- (26) Neubauer 37, 及⁵ *Virgil, Eclogues, Georgics, Aeneid, 1-6*, trans. H. Rushton Fairclough (Cambridge, Mass. : Harvard UP ; London : William Heinemann, 1974) 4 : 174-197.
- (27) Neubauer 46-49, 及⁵ Ovid, *Metamorphoses*, trans. Frank Justus Miller, vol. 2 (Cambridge, Mass. : Harvard UP ; London : William Heinemann, 1976) 12 : 39-63.
- (28) Neubauer 60-65, 及⁵ *The House of Fame* 1110-1281, 1915-2156.
- (29) *The House of Fame*, John M. Fyler's note to 765-81.
- (30) Marcia L. Colish, *The Mirror of Language : A Study in the Medieval Theory of Knowledge*, rev. ed. (Lincoln and London : U of Nebraska P, 1983) 42.
- (31) Chris Wickham, "Fama and the Law," *Fama : The Politics of Talk and Reputation in Medieval Europe*, ed. Thelma Fenster and Daniel Lord Small (Ithaca : Cornell UP, 2003) 16-17.
- (32) Wickham 17.
- (33) Thomas Kuehn, "Fama as a Legal Status in Renaissance Florence," *Fama* 27-31.
- (34) F. R. P. Akehurst, "Good Name, Reputation, and Notoriety in French Customary Law," *Fama* 80-86.
- (35) Sandy Bardsley, "Sin, Speech, and Scolding in Late Medieval England," *Fama* 146-47.

- (36) Barbara A. Hanawalt は“*Of Good and Ill Rpute*” : *Gender and Social Control in Medieval England* (New York and Oxford : Oxford UP, 1998) で、中世の評判について次のように概括して述べている。

Although expressing anxieties over crime, rebellion, and heresy, medieval English communities actually accepted a considerable latitude of behavior between the categories of good and ill repute. Popular poetry showed a relish for those who bent the rules. Jurors were lenient in using capital punishment for felons, officials did not use torture to extract confessions, the king hanged remarkably few peasant rebels, and bishops burned relatively few heretics. But the society also placed a very high value on a person's reputation. To be “of good repute” meant living by the community norms and to be “of ill repute” removed social protections from the miscreant.(14)

- (37) Francis Petrarch, *The Triumphs of Petrarch*, trans. Ernest Hatch Wilkins (Chicago : The U of Chicago P, 1962), ペトラルカ『凱旋』、池田廉訳 (名古屋 : 名古屋大学出版会、2004)。